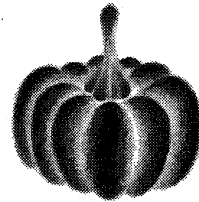


二人のペテロ



中 砂 明 徳

このところ、国立大学の教員も忙しくなってきた。年末から二月にかけての時期は特にせわしない。種々の業務が終わり漸く一息つける三月半ばになると、外国を研究している人たちは「待ってました」とばかりに海外に飛び出してゆく。こないだ、ある学生に「先生はどこに行かないんですか」と尋ねられた。一年中、研究室にじっとりへばりついている人間がいぶかしかったのだろう。

私がほとんど他所へ行かないのは、まず国内外を問わずお呼びがかかるような研究をしていないからだ、面倒くさが

り、いや怖がりの性分が遠距離移動をためらわせるといふこともある。若いころから観光や「自分探し」にはなぜか興味が湧かなかった。

「旅嫌い」だが、十七世紀に異世界に赴いた西洋人の旅行記を読むのは好きだ。なぜ十七世紀なのかはきちんと説明できないが、あえて言うなら、十六世紀の「初心者能天気」^{（一）}と十八世紀人の「知ったかぶり」^{（二）}の中間なのが性に合う、といったところになるか。

さらに、旅嫌いだからこそ、怖れを知ったうえで彼らの果敢さにより強く心惹かれるのだ、と言いたいところだが、

これはこじつけ。旅も旅行記も好きな人はいらるだろうし、旅行記愛好者はことさら珍しくない。需要が存在するからこそ、岩波書店は「大航海時代叢書」^{（一九六五—一九九二年）}の後継シリーズとして、「十七・十八世紀大旅行記叢書」^{（一九九〇—二〇〇四年）}、「世界周航記」^{（二〇〇六—二〇〇七年）}や、さらには架空の「ユートピア旅行記叢書」^{（一九九六—二〇〇二年）}まで出したのだろう。「大航海時代叢書」のモデルとなったイギリスの「ハクルート協会叢書」^{（一八四七年—）}、「大航海時代叢書」に収録されている『東方案内記』の著者にちなんだオラン

ダの「リンスホーテン叢書」(一九〇九年)の両老舗も健在だし、フランスの「マゼラン・コレクシオン」は、歴史は浅いが、セレクションが深い。

むろん、旅行記は西洋人の専売特許ではない。

近年、東洋学の分野で国際的に注目を集めているのが、李氏朝鮮から中国王朝に送られた使節が残した「燕行録」史料群である。研究を推進してきた夫馬進氏の近著『朝鮮燕行使と朝鮮通信使』(名古屋大学出版会)のあとがきを読んで、アイタツと思った。旅行記をやみくもに読んでも成果は挙がるものではないと書かれていたからである。

氏の場合はある史料をきっかけに一気に局面を切り拓いてゆかれるのだが、それは史料への嗅覚と大きな構想力あつてのことである。「楽しみで」と言いながら職業柄「何とかモノにならないかいな」というさもしさが抜けきらない私だが、鼻も利かねば、大局観もない。かくし

て、結局は旅行記の消費者でしかなく、下手の横好きと居直るよりほかないのである。

お気に入りの旅行家は何人かいて、ローマの名門出身のビエトロ・デッラ・ヴァッレ(一五八六—一六五二)はその一人。当時の旅行は外交、商用、宣教、そして巡礼にほば尽きていた。

彼もまた出発時は巡礼服を身にまとっていたが、エルサレムが終着点とならなかったのは、名声への野心があつたからである。旅行中に在ナポリの友人マリオ・スキパーノ宛に書き続けた手紙は修改を経て公刊され、版を重ね、やがて各国語に翻訳されたから、まずは目的達成と言つてよい。

もっとも、受け止め方はさまざまで、『西東詩集』の注解において、オリエントのイメージをインスパイアされたと言っているゲーテ(一七四九—一八三三)のような人もいれば、『ローマ帝国衰亡史』

でベルシアについて書くために旅行記を手広く読んだギボン(一七三七—一七九四)は、ジャン・シャルダンの旅行記を賞賛する一方で、ビエトロをその他大勢と一括りにするばかりか、「耐え難いまでに空虚で冗長」と評している。

これ以後の一般の評価は、どちらかといえば後者に傾く。後輩のシャルダンがペルシアを、フランソワ・ベルニエがインドの社会・文化をじっくり掘り下げ、西洋人のアジア観に大きな影響を与えたのに対し(いずれも「十七・十八世紀大旅行記叢書」に収録)、トルコ・ペルシア・インドを横断し東方に十年以上も滞在しながらビエトロの足取りがふわふわしているからだろうか。近年彼の旅行の考古学的価値や、ペルシアの知識人との交流を見直す研究も出てきているが、いまだに旅行記全体の現代校訂版は出ていない。しかし、彼の旅行記は理屈抜きに楽しいし、旅の途中で結婚した東方キリスト教徒の女性に先立たれた後、その遺体に

防腐処置を施して(彼にはエジプトでミイラを盗掘した前科がある)インドそしてイタリアへ運んだ彼の奇矯ぶり(帰国後すぐに再婚して十四人の子を為している)、そのパロツクの過剰からも目が離せない。また、これほど女性美を描くのに熱心な旅行記も当時としては珍しかろう。色好みというより、それを恥ずかしげもなく開陳するあけすけさが際立つ。

ピエトロは聖地巡礼後、バグダッドで十八歳のエキゾチックな美女マアニと結婚し、一六一七年二月にサファヴィー朝の首都イスファハーンに入った。このまちで、彼は翌月、そして遠征中のアッバース大王に会うために出発する直前の十二月に、手紙を書いている。前の手紙で都市やペルシア全般のことをあらあ述べたので、後の手紙ではインドとペルシアの異教徒ゾロアスター教徒の信仰の話を取り上げる。ギボンが参考にしようとしたのは後者の部分である。なぜペルシアでインドの話をするのかと言えば、イ

スファハーンにはたくさんインド人が暮らしていたからである。

数年前にこの手紙まで読んできて、私はちよつと意表を突かれることになった。

カースト制、ムガル帝国の成り立ち、信仰について解説した後、美しい踊り子の話に脱線するところがいかにも彼らしい。そして信仰の話に戻り、インドの話の締めくくりとして、偶像信仰が以東の中国や日本にも存在し、各地で名前こそ違うが実態は同じであること、魂の消滅や神の不在、あるいは神は第一質料であるとする諸説を紹介し、これらについてピエトロに語ってくれたインフオーマン^ト、Pietro Paulino Chibe の名を挙げ

る。さらに、彼はローマに勉学に向かう途中なので、ナポリに立ち寄ることがあつたら、ラテン語を操るから色んなことが聞けるだろうし、とくに「絵筆とインク壺(墨)」を使って日本の文字だけでなく

無数の漢字を書くのは見ものだ、友人に勧めている。

ペルシア篇に収録された原書簡の校訂本(一九七二年)の注釈者はこの日本人を同定できないとしているが、キリシタン史をかじった者なら自明の事柄である。遠藤周作が二度も作品に取り上げ『銃と十字架』一九七九年、『王国への道』一九八一年)、松永伍一が評伝(『ペトロ岐部』一九八四年)を書き、二〇〇八年には他の殉教者とともに列福されたペトロ岐部^{キリシタン}に他ならない。

彼は一五八七年に国東半島で生まれているので、ピエトロの一歳下になる。セミニリオで受けたラテン語教育が、ピエトロとの意思疎通に役立った。修了後イエズス会入会の仮誓願を立てて同宿として活動したが、一六一四年の禁教令で国外追放となり、マカオに向かったキリシタン史研究の大家、五野井隆史氏の『ペトロ岐部カスイ』(一九九七年)は、マニラを経たマカオに渡ったとする)。

しかし、この機会に司祭になろうとした同宿たちに対するマカオの人々やイエズス会士の仕打ちは彼らを失望させるものだった。そこでベトロらはインドに向かうのだが、ゴア到着から念願のローマ入りに至るまでの彼の足取りは杳としていて、かろうじてエルサレムを訪れたことがわかるだけである。だから、遠藤も、松永も、そして五野井氏も、その間のことは想像で書かざるを得なかったのである。

「二人のベテロ」にそれぞれ関心を持つ人たちがこの手紙の記事に気付いてい

ないことを知った時思わずほくそえんだが、しよせん袖摺りあう程度の二人の出会いについて他人に話すことはなかった。

今回この一文を草するにあたって、あわてて近年の研究をチェックしてみたが、やはり誰も指摘していないようである。私のように独り悦に入っている人が他にいるかもしれないが、たぶんないだろう。キリシタンに関心を持つ日本人が享楽家の旅行記に手を伸ばすとは考えにくいし、逆に旅行記を愛する西洋人にとってこの日本人は多彩な登場人物のうちの端役に過ぎないからである。

私を知る範囲で日本人に多少なりとも触れているのは、旅行記をもとに評伝を書いているイギリス人作家・美術研究者のウィリアム・ブランド（『ビエトロの巡礼』一九五三年）だけだが、「日本人から極東のカリグラフィーについて少々学んだ」と記すのみで、岐部の名前に触れない。旅行記を摘訳したイギリス人ジャーナリストで作家のジョージ・ブル（『巡礼者——ビエトロ・デッラ・ヴァッレの旅』一九八九年）はこの手紙を翻訳しているが、日本人との出会いの部分はカットしている。

その後インドに渡ったビエトロが一六

二四年十一月にゴアで書いた手紙では、市民や教会が日本の殉教（元和の大殉教）など一六二二年の殉教者たち）の報に沸き立っていることを伝え、カルロ・スピノラら三人のイタリア人殉教者に言及している。この時彼の脳裏をイスファハーンで出会った日本人のことが掠めたのだろうか。

実は、ローマで司祭となった岐部は海路日本をめざし、この年ゴアに到着していた。ピエトロは南インドへの旅から同年一月にゴアに戻ってきていたから、二人のゴア滞在は重なりあい、出会っていてもおかしくない。しかも、手紙では、岐部と同じ船でインドに到着したイエズス会士のエチオピア宣教師との間に親密な交流があったことを述べているのである。しかし、日本人司祭への言及はない。

だから、これは小さなエピソードではない。しかし、作家遠藤がこのことを

知っていたら、岐部の造形はどうなっただろうと想像するのは楽しい。『銃と十字架』では、キリストをいったん見捨てたペテロのように日本を一度は棄てた、そのやましさを終生抱えた懊悩の人に描かれ、『王国への道』では、主人公山田長政とある種の双生児として造形されたせいか、剛毅なイメージが前面に出るが、相変わらず堅物である。しかし、陽気なバロック人と出会い、仏教のほかにあった男には別の造形もありうるのではないかと思うのである。

（なかなすな あきのり・アジア史）